

論文の内容の要旨

論文題目 朝鮮の地方社会における植民地経験 - 慶北尚州の歴史民族誌

Colonial Experience in Korean Local Society

- A Historical Ethnography of Sangju, Kyeong-buk

氏 名 板垣 竜太

本論文は、朝鮮の地域社会における植民地経験を、慶尚北道尚州(*Sangju*)の事例を中心として具体的に明らかにすることを目的としている。本論文の焦点は<近代>、なかんずく1920～30年代の社会変化であるが、それを16～19世紀の<近世>に形成されてきた社会関係の持続と転換という観点から明らかにする。地域社会の分析スケールは<邑>(=郡県)である。尚州という<邑>の社会変化について、地域史料・刊行物・政府記録などの広範囲な史料調査と聞き取り調査を併用し、多角度から分厚く記述する。

第1章では、<近世>の尚州の社会構造を動的に概括した。

「尚州牧」は、高麗時代から朝鮮王朝時代にかけて、徐々に<邑>として形成されていった。ここに地域社会における支配エリートとして定着していったのが士族であった。ほとんどの士族は14～17世紀にかけて尚州に「入郷」してきた。士族は農村部に定着し、16世紀頃になると、郷案・郷射堂・洞約・書堂などを媒介として、相互の結束を固め、地域の支配を強めていった。そこに起こったのが壬辰倭乱(1592)であった。乱に対し、多くの士族は義兵として立ち上がった。乱後、そうした士族やその家門が中心となって復興が進められるとともに、書院建設や邑誌の編纂など、それまで以上に地域エリートとしてのネットワークを強め、地域社会の支配秩序をつくりだしていった。一方、吏族は世襲の役務として地方行政実務を担当する地域エリートであり、士族よりは一段低く扱われていた。吏族は郷役を分担しながら地方行政を担うとともに、邑内(邑城およびその周辺)を中心とした活動を展開していった。

19世紀になると、そうした地域エリートの支配秩序は変動を示すようになった。士族志向の吏族、「幼学」をかたる民衆などがあらわれたり、士族から「土豪」となる一族が出てきたりなど、士族の権威が徐々に揺るがされていた。また官、吏、土豪らによる民衆への収奪が激しくなっていき、小農民の間では不満が広まった。そうした中で壬戌民乱(1862年)や、甲午農民戦争(1894年)が起こった。こうした矛盾を抱えながら、〈近世〉の関係性が〈近代〉に持続していくことになった。

第2章では、20世紀前半における尚州社会の変容を、「植民地化」と「都市化」という側面から検討した。

「植民地化」のプロセスに関しては、軍隊・警察という植民地支配の暴力装置の展開、官僚機構の再編、日本人社会の形成という3つの側面から検討した。1907年以降、日本の軍隊が、尚州にも入り込み、警察と結合して1910年代の憲兵警察制度が確立した。1919年に普通警察制度に転換するとともに急速に駐在所が拡充され、1920年までに1面1駐在所制度が確立した。官僚機構に関しては、まず韓末の徴税制度改革とともに、地方行政を担っていた郡守・郷吏が排除され、日本人官僚が入り込んできた。1910年代には郡の下の「面」が急速に末端の官僚機構として拡充され、30年代になると、農村振興運動を契機に、「面」の下の「部落」に統制が及んでいくことになる。こうした支配機構の再編とともに、尚州社会に植民者たる日本人が入り込んできた。日本人は、邑内を中心に居住し、邑内人口の8~12%を占めていた。職業構成としてはまず商業・交通業が多く、ついで農業、公務・自由業、工業の順となっていた。

そうした中で、邑内の再編が進んだ。邑城および官衙は併合に前後して、植民地行政機関が置かれるなど換骨奪胎させられていった。また邑内は、産業構成、交通、風景などの点において農村部とは異質な「市街地」となっていた。

こうした変化にさらされた農村部を、養蚕業と酒造業を中心に検討した。養蚕業においては、1910年代に繊維資本に適合するように行政の介入が急速に進み、1920年代後半になると、繊維大資本と行政が直接養蚕農家を支配に置こうとする動きが加速した。しかし尚州では〈近世〉以来の養蚕業の地域的広がりがあり、地元で製糸・製紬されたものがかなりの程度みられた。一方、酒造業においては、酒税法令の導入により、自家用酒造ができなくなるとともに、地域資本家としての酒造業者が形成されていった。しかし〈近世〉以来社会に深く浸透していた酒類の自家用酒造は絶えることがなく、それに対し税務署と酒造業者がつるんで「密造」摘発をおこなうなど、酒の製造は、植民地当局・地元資本・農家が

対峙する日常的な政治の場となっていた。

第3章は植民地期における地域エリートの転換について論じた。

士族および吏族のネットワークは、植民地支配下での変化に呼応しつつも、積極的に存続されていた。一方、邑内の事業で士族・郷吏の地域エリートが共同で事業をおこなうなど、新たな結合の様態もみられた。

こうした状況は、三一運動や、1920年代に地方においても開けた政治空間にも反映していた。尚州の三一運動は、士族家門出身ないし漢文の素養をもった者で、なおかつ新式教育を受けた「青年」または「有志」とよばれる人々がかなりの役割を果たしていた。また、1920年代において地域の社会運動を主導していたのはやはり「青年」「有志」であったが、その一方で、そのなかには士族や吏族の家門の者が多数いた。そうした政治の場として格別の空間だったのが邑内である。邑内には多様な団体が集中してだけでなく、青年会や新幹会のように、邑内を中心として農村部とも連動した運動体が出現した。日本人と朝鮮人の民族対立や、新旧のエリート間の対立がより明確にみえるのも邑内においてだった。

このように、いわゆる「文化政治」下で邑内を中心に限定的ながら開かれた政治空間は、1920年代の後半以降、徐々に官憲の介入を被る等の理由によって変容したり、淘汰されたりしていった。それとともに「有志」ということばの意味が、次第に体制に近い有力者というような意味合いに固定化していったと考えられる。

第4章は、教育を軸として、社会変化の様態を明らかにした。

<近世>の漢文教育の場は、士族家庭の男性とそのネットワークを中心に、家庭 独先生 私塾 書堂のように重層的に連なって形成されていた。書院や郷校の教育機能はいち早く喪失したが、書堂や家庭の漢文教育は植民地期を通じて幅広く存続した。一方、士族の中には、ネットワークを利用して韓末に新式の学校を建てようという運動を展開する者もあらわれた。

1910年代には学校数・生徒数において漢文教育施設がはるかに圧倒していたが、1920年代に入ると、新たな動きが二つあらわれてくる。一つは「有志」らによって私設の講習所が結成されたことである。そうした講習所は、毎年道当局の認可を受けなければならないなど、制度的に不安定な側面をもっており、1930年代になると影を潜めることになった。もう一つは、公立普通学校（公普）の設立運動である。公普は地域の「有志」の運動によって建てられ、しばしば講習所設立の財政的な基盤を吸収統合するかたちで設立された。新しくできた学校は父兄会をはじめとした組織化、行事の開催、農業経営への介入などを

通じて地域社会との関係を構築していった。

こうしたなかで、学校に通う者も徐々に増えてきた。しかし学校の絶対的な少なさに加え、市街地であるかどうか、いつ頃普通学校が設立されたか、男か女かといった要因に規定されて、広く不就学者を生みだしていた。本論文では、学籍簿・除籍簿から学校と子どもとの関係を具体的に分析した。1920年代には漢文教育・私設講習所などのオルタナティブな教育施設が入学前の学歴として大きな位置を占めていたが、30年代になると徐々に周辺化していった。それと並行して通学者の低年齢化が進行した。また、学校への就学が経済的条件によって左右され、そうした階級性は女兒においては男児よりも鮮明にあらわれた。さらに除籍簿の分析からは、10人に1人の退学者という流動性の高さに加え、階級による退学動機の差異が明らかになった。

第5章は、第1～4章で記述したような〈近代〉の社会を生きる日常の経験とはどのようなものかについて1930年代の一農村青年「S氏」の日記の記述に即して検討した。

まず、S氏の消費行動を中心とした検討からは、メディア、通信、交通、時計、医療などと新たな文物を積極的に取り入れつつも、かならずしもそれを全面的に受容するわけでもなく、陰曆や漢方医療を評価したりなど、「古い」と思ったものを価値に見いだすということもあった。これは、〈近世〉の関係性が広く残る地域社会において生活するなかで身体化されたものの根強さを物語っているといえる。すなわち、S氏は単純に受動的に消費行動をしていたのではなく、自らの置かれた社会条件のなかで能動的に取舍選択をしながら活動していたことをみとることができる。

S氏の社会認識に関係した日記の叙述からは、新しい文物への接し方と古いものへの思い、農村へのアンビバレントなまなざし、都市へのあこがれ、分裂した「日本」の存在、働くことへの思いなど、社会に対するS氏の認識を見いだすことができた。と同時に、目の前の貧困から「同胞」を想像したり、面事務所で日本語が強制されて「困難」を感じたり、「憂鬱症」になやまされたりなどの矛盾や暴力の痕跡を垣間見ることができた。すなわち、S氏の経験において、〈近世〉と植民地支配下の矛盾を含む〈近代〉とが重層的に折り重なっていたのである。

以上のように、〈近世〉の関係性の持続と、〈近代〉の不平等性とが重層的に絡まり合いながら、地域社会における植民地経験をかたちづくっていったのである。

(以上、3,964字)